

よりの事なり。是は御國替の時、能侍古郷に残るが故なり。往古は落去は各別、餘り御國替はなし。」(信濃史料叢書第五、下條由來記五頁上段)。

(2)

「下條家百騎といふ事、弘治二年六月、武田家へ屬し軍役を書上し分なり、居城には三百騎の家なり、……軍役百騎の者共は、何方迄も騎馬役相勤む、中身代以上なり、然共下條家滅亡の時節、有増遠國へ引拂、残りたるは譜代者、前々より在所持の末葉共、地方にかゝり所々に僅残りたる分なり、吉岡常語の分は諸士共跡方なく散亂故知れたるは少々也。」(下條由來記、「信濃史料叢書第五」十六頁下段)。

第二節 下伊那郡に於ける城主及び豪族の配置とその變遷

一 概 観

徳川統一以前の下伊那郡の城主を北より順次列舉すると、龍西(天龍川の西側)に於て、北より、大島氏(大島村)、名子氏(同上)、松岡氏(市田村)、坂西氏(飯田町)、小笠原氏(松尾村)、分家小笠原氏(龍丘村)、下條氏(下條村)、關氏(且開村)の諸氏あり、龍東に於て、北より香坂氏(大鹿村)、知久氏(上久堅村)、遠山氏(和田村)の諸氏がある。

これら諸城主のうち、徳川氏統一後も尙存続してゐるのは、小笠原、知久の二氏に過ぎない。然も小笠原氏は、天正十八年に關東本庄に移封され、伊那に残つたのは知久氏のみである。それも一度は郡外に逃亡して後歸城したもの

であり、僅か三千石の旗本としてゐる。

以下上述の諸城主及びそれに属する豪族の變遷の概略を述べるが、その歴史に關しては諸書により見解を異にしてゐる。最近の研究の結果である市村氏の伊那史概要に據るが最もよいと思ふが、豪族に關する記録がない。此一節は城主よりもむしろ之に屬し後各村落に土着し、御館被官制度と關係ある各豪族の興亡を逃べることを主眼とする故、此點に詳細である南信伊那史料(明治三十四年出版)によることとした。

二 諸豪族の興亡

香坂氏 「興國中香坂高宗大河原郷を領し、此處に築城す。それ以來正統綿々繼續して天正二十三年に至り武田氏のために没落して家名を失ふ。」

此の香坂氏一族が武田のために滅亡させられた後、隣村南向村に土着して今日の高坂氏その他の御館、御家をなすと云はる。

遠山氏 「景廉、頼朝の命に依り建久八年伊奈郡遠山の逆徒を征伐す。其功に依り遠山の地を食邑に賜り、居館を構へ姓を遠山と改む僻邊なる故居ること僅少にして又鎌倉に歸る。その後景廣遠山藏人遠江守天文中武田信玄に屬し大に戦功あり弘治中舊縁に依り再び遠山に於て知行、甲州割四百三十貫文を賜り盛平山に城壁を構へ居住す、是遠山氏中興の祖とす。景廣、三弟圖書景俊(高遠城に任ふ)は天正十年織田氏の攻撃に對し高遠城を守るも、城陷るに及び景廣は遁れて鎌倉に客死し、圖書は戦死す。家臣遠山刑部同彌藏、知久霜助、佐藤、後藤、近藤の一族は討死す(註)。」